様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ７ 月 ３１ 日現在

機関番号：３２６１８
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2013
課題番号：２４６５２０６３

研究課題名（和文）２０世紀イギリスの「新しい少女」―女学校文化とガールガイド文化

研究課題名（英文）"New Girl": Schoolgirls' and Girlguides' Culture in Twentieth Century Britain

研究代表者
志渡岡　理恵（SHIDOOKA, Rie）

実践女子大学・文学部・講師

研究者番号：８０５９７５２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　900,000円、（間接経費）　270,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、２０世紀初頭に人気のピークを迎えたイギリスの女学校小説とガールガイド小説という少女小説のジャンルの展開に注目した。家庭という私的領域を出て女学校やガールガイド組織の一員となり、公的領域に入っていく「新しい少女」を描いたこれらの小説群は、女性らしさ、教育、少女時代に関わる問題系に深く関与し、新たな女性の理想像を定義した。

研究成果の概要（英文）：This project focused on the development of the girl's school story and the girl guide's story whose golden age was early twentieth century in Britain. These girls' stories featuring the "New Girls," female proragonists who move out of domestic space into the public world, engaged with ideas of femininity, education and girlhood, and defined a new female ideal.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：英米・英語圏文学

キーワード：少女文化　ジェンダー　女子教育　帝国主義　市民教育

１．研究開始当初の背景

英米を中心とする海外では、ファエミニズムをはじめとする新しい文学批評の流れを受けて、1970 年代を起点に 19 世紀から 20 世紀イギリスの少女文化に対する関心が高まってきた。たとえば、Mary Cadogan and Patricia Craig の You ’re Brick Angela: The Girl ’s Story 1839-1985 (1976) は、数多くの少女小説をとりあげ、このジャンルの全体像を捉えようとした先駆的な著作である。Sally Mitchell の The New Girl: Girls ’ Culture in England, 1880-1915 は、少女像が大きく変わった世紀転換期に焦点を絞り、少女小説ばかりでなく、ガールガイドや女学校のような団体・組織の活動にも僅かながら目配りをきかせた画期的な研究書である。最近では、第一次世界大戦と少女文学の関係を論じた Jane Potter の Boys in Khaki, Girls in Print: Women ’s Literary Responses to The Great War 1914-1918 (2005) や、Janie Hampton の How the Girl Guides Won the War (2010) など、より細分化した少女文化の研究がなされ、高い評価を得ている。

日本では、イギリスの少女文化に関する包括的な研究はまだない。しかし、大正から昭和初期の女学生文化を紹介した弥生美術館・内田静枝編『女學生手帖―大正・昭和乙女ライフ』(2005) や、明治期の女子教育をめぐる小説や言説を論じた菅聡子『女が国家を裏切るとき―女学生、一葉、吉屋信子』(2011) 、日本のガールスカウトの歴史をたどった矢口徹也『女子補導団―日本のガールスカウト前史―』(2008) など、この時期の日本の少女文化に関する研究は最近特に盛んであり、イギリスの少女文化との関連に言及されることもしばしばある。これまでイギリスの女性の活動領域拡大と文学、帝国主義の関係を解明することを目標に研究を続けてきたが、前述の Sally Mitchell の著作に刺激を受け、研究社『英語青年』において「帝国の少女―学校小説とナショナリズム」(2008)、「ガールガイド的冒険小説」(2009) という記事を執筆する機会を得た。さらに研究を進める中で女学校小説のカリスマだったアンジェラ・ブラジルの作品、女学生向けの雑誌 Schoolgirls ’ Own、ガールガイドを主人公にした小説群と、それから派生したと考えられる冒険小説の包括的な分析の必要を感じたことが本研究を着想するきっかけとなった。

２．研究の目的

１）少女文化と帝国主義・ナショナリズムの関係の解明

１９世紀後半から２０世紀前半のイギリスは、ボーア戦争や第一次世界大戦を経験し、富国強兵には将来母となる少女たちの身体の健康が重要であると考えた。そのため、女学校小説はスポーツをする少女たちの姿が盛んに描かれるようになる。また、軍人の Robert Baden-Powell が創設したボーイ・スカウト組織から派生したガールガイド組織は、手引書のタイトルが The Handbook for Girl Guides, or How Girls can Help Build the Empire であることからも明らかなように、少なくとも創設当初は帝国主義推進を強く意識したものだった。本研究は、当時の少女文化の両翼を担う女学校文化とガールガイド文化を帝国主義・ナショナリズムとの関係に焦点を当てて分析することにより、これまで看過されてきた両者の関系の解明を目指すものである。

（２）日本とアメリカの少女文化研究への新たな知見の提供

女学校文化とガールガイド（ガールスカウト）文化は、日本とアメリカにも大きな影響を与えた。たとえば、日本においてガールガイド活動は、女子補導団として女学校を中心に広がり、現在もガールスカウトとして少女文化の一翼を担っている。本研究を基盤に、今後イギリス、日本、アメリカの女学校文化とガールガイド（ガールスカウト）文化の比較へと研究を進めていければ、より相対的・包括的な少女文化の理解が可能になると思われる。

３．研究の方法

平成２４年度は、Susan Hamilton and Janice Schroeder eds., Nineteenth-Century British Women ’s Education, 1840-1900 (2007)や Jane Robinson, Bluestockings: The Remarkable Story of the First Women to Fight for and Education (2009) などを参照しながら、女子の中・高等教育の始まりと展開の歴史についての知識を深めるとともに、学校小説というジャンルの特徴を Isabel Quigly, The Heirs of Tom Brown: The English School Story (1982) などを参考にして押さえたうえで、Mary Cadogan, Mary Carries on : Reflections on Some Favorite Girls ’ Stories (2008) のような少女小説を幅広く扱った著作を参照しながら、女学校小説の創始者とされる L.T. Meade の活動を中心に、女学校小説の成立過程をまとめ、当時もっとも人気の高かった Angela Brazil の生涯と作品に関する文献を収集し、分析した。また、女学生向けの雑誌 Schoolgirls ’ Own の中の女学校に関する記事も分析した。

平成２５年度は、まず、イギリス・ス

カウト連盟が創立 100 年を記念して刊行した An Official History of Scouting (2006) や、ガールガイド組織に長らく所属していた Alix Liddell の The Girl Guides 1910-1970 (1956)、スカウト創始者ロバート・ベーデン＝パウエルの妻であり、ガールガイド組織の長を務めたオレーヴの活動を描いた Ellen K. Wade, The World Chief Guide: Olave Lady Baden-Powell, G.B.E (1957) などを参照して、ガールガイド組織の活動の歴史をまとめた。また、ガールガイドの手引書の初版 The Handbook for Girl Guides, or How Girls Can Help Build the Empire (1912) を読み、指針や具体的な活動内容などについての知識を深めた。次に、初のガールガイド小説と目されている Dorothea Moore, Terry the Girl Guide (1912) や、A. C. Osborn Hann, Pegs Patrol (1924)、Elsie J. Oxenham, The Camp Mystery (1932) などのガールガイド小説群を分析した。またガールガイドが被害者として登場数する Agatha Christie の The Body in the Library (1942) などを用いて、当時のガールガイドの一般的なイメージについても考察した。さらに、女学生向けの雑誌 Schoolgirls' Own の中のガールガイドを主人公にした短編小説とガールガイド関連記事（バッジを獲得するための勉強法、制服の手入れの仕方、キャンプでの料理法などを解説する記事）を分析し、ガールガイド文化について考察した。最後に、女学校文化とガールガイド文化の関連について調べ、この２つがどのように連動して当時の少女の生活を形成していったのか検討した。

４．研究成果

〔雑誌論文〕（計　6　件）

３の手順で作業を進めながら、研究成果は５に挙げる論文６件、学会発表３件で公表した。本研究により、家庭という私的領域を出て女学校やガールガイド組織の一員となり、公的領域に入っていく「新しい少女」を描いた小説群は、女性らしさ、教育、少女時代に関わる問題系に深く関与し、新たな女性の理想像を定義したことが判明した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

①志渡岡理恵、「罪と罰―ニューサウス・ウェールズへの旅」、『十八世紀イギリス文学研究５』、査読有、第５巻、2014 刊行予定、148-162

②志渡岡理恵、「“Playing the Governor's lady to the blackies”―『ジャマイカ滞在記』における人種、ジェンダー、ナショナリティ」、『実践女子大学文学部紀要』、査読無、第 56 巻、2014、21-30

③志渡岡理恵、「「監獄の天使」と流刑」、『実践英文学』、査読有、第 66 巻、2014、1-16

④志渡岡理恵、「マレー社のガイドブックを携えて―“French Life”におけるツーリズム」、『ギャスケル論集』、査読有、第 23 号、2013、71-83

⑤志渡岡理恵、「アガサ・クリスティと第一次世界大戦」、『実践英文学』、査読有、第 65 巻、2013、49-62

⑥志渡岡理恵、「アイルランドから来た新入生―The New Girl at St. Chad's におけるナショナリズム」、『実践女子大学文学部紀要』、査読無、第 55 巻、2013、16-25

〔学会発表〕（計　3　件）

①志渡岡理恵、「監獄の天使と流刑」、第 39 回イギリス・ロマン派学会全国大会、2013 年 10 月 20 日、安田女子大学

②志渡岡理恵、「カナダ移住―『メアリ・バートン』の結末が意味するもの」、第 25 回日本ギャスケル協会大会、2013 年 10 月 5 日、中央大学

③志渡岡理恵、「スクールガールの野外活動―For the Sake of the School(1915)における市民教育」、第 13 回テクスト研究学会大会、2013 年 8 月 30 日、甲南女子大学

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし。

６．研究組織
(1)研究代表者
志渡岡理恵（SHIDOOKA RIE）
実践女子大学・文学部・専任講師
研究者番号：80597526

研究者番号：

(2)研究分担者
なし。
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
なし。
(　　)

研究者番号：